

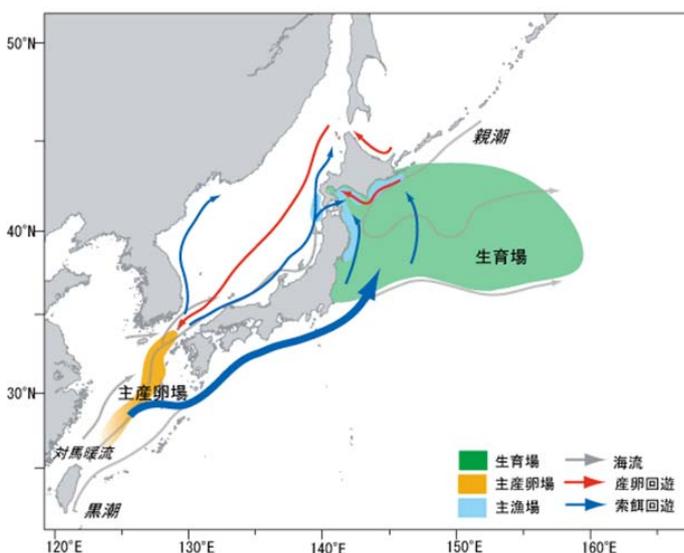


スルメイカ冬季発生系群 令和元年度資源評価結果

1

生物学的特性

スルメイカ冬季発生系群の生活史と漁場形成模式図

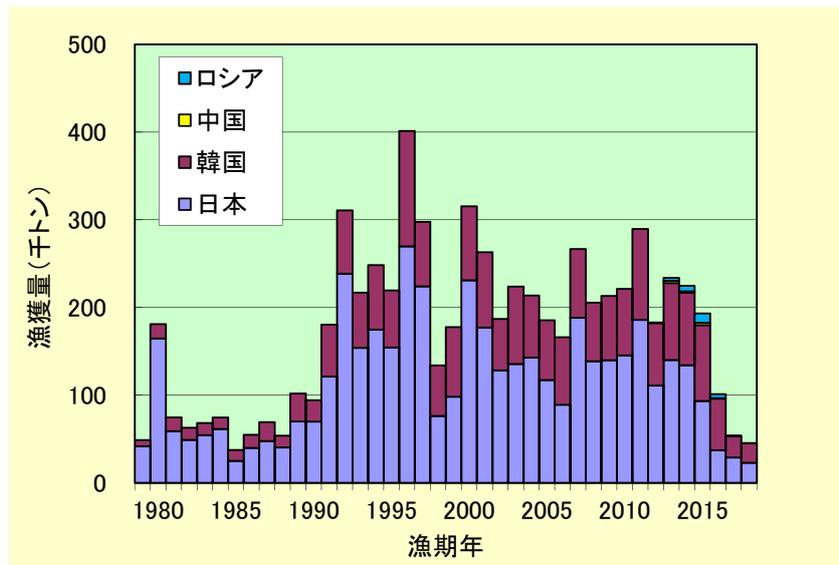


- ・寿命：約1年
- ・成熟開始年齢：雄は約6～7カ月、雌は約7～8カ月以降
- ・産卵期・産卵場：12～3月、東シナ海
- ・食性：甲殻類、小型魚類、いか類
- ・捕食者：主に大型魚類、海産ほ乳類

- ・東シナ海で12～3月に産卵
- ・太平洋を北上、日本海を南下
- ・主に太平洋で8～12月、日本海で11～2月に漁獲

2

漁獲の動向



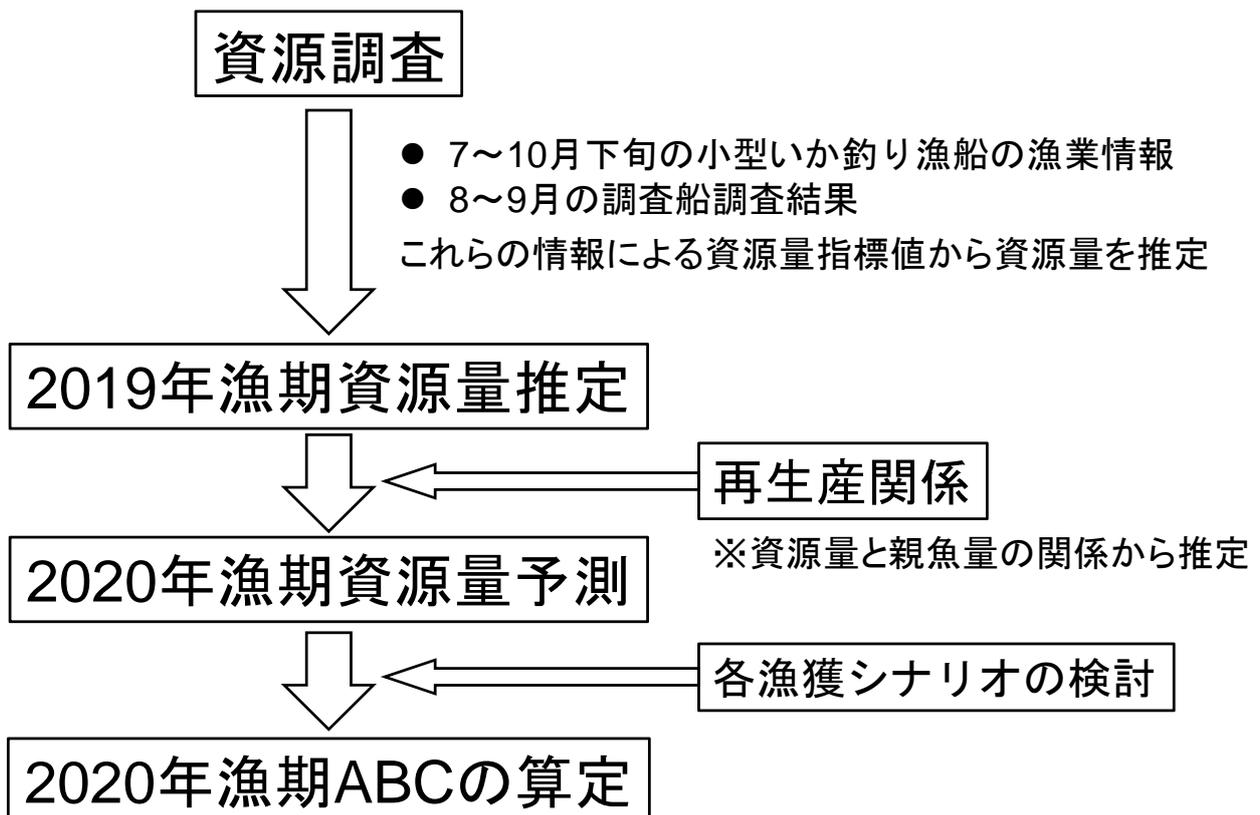
漁期年: 4月～翌年3月

- いか釣り、底曳き網、まき網、定置網で漁獲
- 2018年漁期漁獲量 全体4.5万トン(前年比85%)

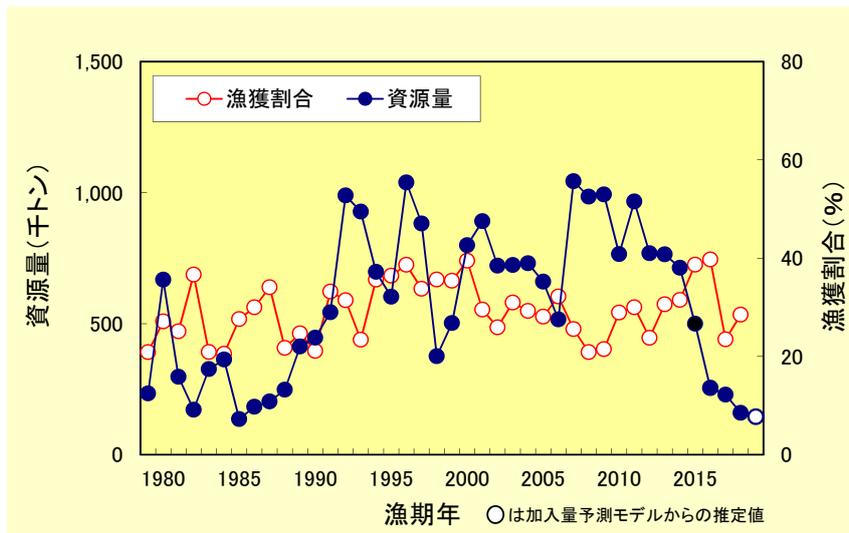
内訳 日本:2.3万トン、韓国:2.2万トン、中国:0トン、ロシア:277トン

*中国とロシアの漁獲量は太平洋海域における漁獲量としてNPFCで報告されているもの
 ロシア:2012年から、中国:2013年からの報告値

資源評価の流れ

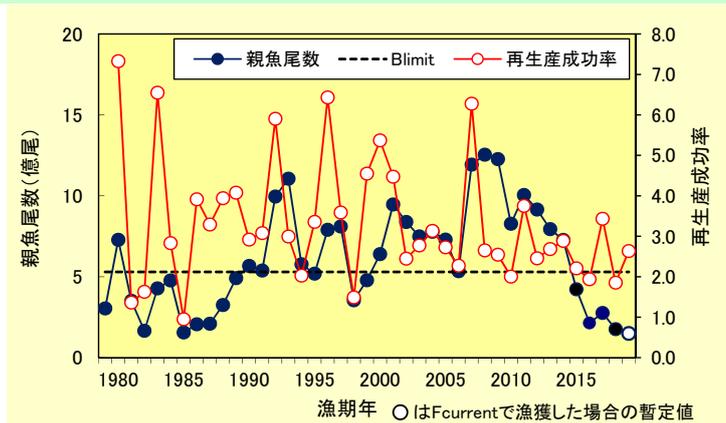
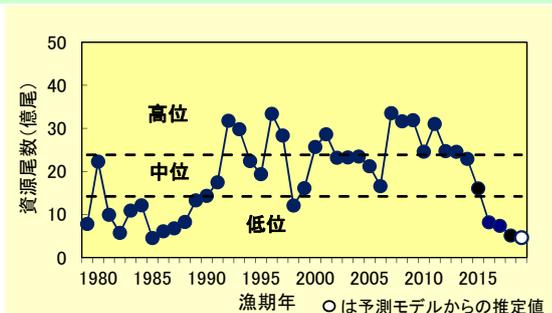


資源の動向①



- 資源量： 小型いか釣り漁業や調査船調査の情報を基に推定
2015年漁期以降大きく減少に転じる
2019年漁期は14.4万トンと推定(過去2番目に低い)
- 資源動向： 過去5年間の推移から「減少」
- 漁獲割合(漁獲量÷資源量)： 28%

資源の動向②



※水準区分 低位/中位:資源尾数(14.2億尾)
中位/高位:資源尾数(23.9億尾)

- 資源水準： 2019年漁期の資源尾数は4.6億尾であることから「低位」と判断
- Blimit： 環境変化等により高い再生産成功率となったときに高い加入量が期待できる親魚量であり、5.3億尾
(この値を下回ると、良好な加入量(毎年、漁獲対象に加わる子供の量)が期待できなくなる水準)
- 2019年漁期後の親魚量は、1.5億尾と推定され、Blimitを下回る
- 再生産成功率(加入尾数÷親魚尾数)： 産まれてから漁獲対象となるまで生き残る確率であり、2002年以降低めの年が多い

資源評価のまとめ

- ・ 資源量は2015年漁期以降大きく減少しており、2019年漁期は14.4万トン過去 2番目に低い水準と推定された。
- ・ 1979年漁期以降の資源尾数の推移から、資源水準は低位、過去5年間の資源尾数の推移から、動向は減少と判断した。
- ・ Blimit = 5.3億尾、16.5万トン
- ・ 2019年漁期終了後の親魚量は1.5億尾(4.7万トン) で、Blimitを下回ると推定されたことから、資源の回復が必要な状況にあると判断した。
- ・ 2002年漁期以降の再生産成功率は低めになる年が多く、産まれてから漁獲対象となるまでに生き残る確率が低下している可能性が考えられた。そのため、将来の加入量の見積もりには、2002年漁期以降の再生産成功率を用いた。

7

2020年漁期ABC表

- ・ 2020年漁期の資源量と、漁獲シナリオ（管理基準）からABCを算出

資源量(2020)=124千トン、親魚量(2019)=47千トン、Blimit=165千トン

漁獲シナリオ (管理基準)	Target/Limit	2020年漁期 ABC (千トン)	漁獲割合 (%)	F値 (現状のF値 からの増減%)	2024年漁期後の 親魚量 (千トン) (80%区間)	確率評価(%)	
						2024年漁期後に 2019年漁期後の 親魚量を維持	2024年漁期後に Blimitを維持
親魚量の増大 (B/Blimit×Fmed) (Frec)	Target	7	6	0.09(-84%)	322(88~636)	96	69
	Limit	9	7	0.11(-80%)	289(79~572)	95	64
親魚量の増大 (5年でBlimitへ回 復) (Frec5yr)	Target	9	7	0.10(-81%)	301(82~595)	95	66
	Limit	11	9	0.12(-77%)	266(73~526)	95	59
		2020年漁期 算定漁獲量 (千トン)					
親魚量の維持 (Fmed)	Target	24	19	0.30(-43%)	110(30~217)	77	17
	Limit	29	23	0.38(-29%)	75(21~149)	59	8
現状の漁獲圧の維 持 (Fcurrent)	Target	32	26	0.42(-20%)	59(16~117)	46	5
	Limit	38	30	0.53(±0%)	35(10~69)	21	1

8